

孤立環境の日本語教育における コミュニケーション・ストラテジー能力の独学教材の設計 -ICT 活用の足場かけ-

Designing Self-Taught Materials for Communication Strategy Skills
in Japanese Language Education in Isolated Environments
—Scaffolding for the use of ICT—

川上亮子¹ 戸田真志^{2,1} 鈴木克明^{2,1} 平岡斎士^{2,1}

Ryoko KAWAKAMI¹ Masashi TODA^{2,1} Katsuaki SUZUKI^{2,1} Naoshi HIRAOKA^{2,1}

1 熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻

2 熊本大学教授システム学研究センター

1 Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

2 Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞ 孤立環境の日本語教育は、日本語活用場面が少なく、コミュニケーション能力を練習する場合は限られる。実際の会話となると会話の目的を達成しないまま会話を継続できない学生が多い。本研究は単純な単語や文法の知識ではなく、それらを活用するストラテジー能力をコミュニケーション能力の基幹と位置づけ、ICT を活用したそれらの独学教材の設計について報告し、最後に設計から開発に進めるための今後の展望について述べた。

＜キーワード＞ コミュニケーション能力 ストラテジー能力 ICT 活用授業

1. はじめに

日本語教育では、日本語で会話をしたいというニーズに応えるべく、文法中心から会話中心の教材へと移行してきた。そのため、教室内での学習者同士の会話も以前より円滑に行われるようになってきている。福島・イヴァノヴァ（2006）は、地域内に日本語コミュニティもなく、旅行、留学で日本に行くことも稀で、日本語との接触の少ない海外環境における日本語学習環境のことを「孤立環境の日本語教育」としたが、この様な環境において、教室のみの会話練習では、実際の会話になると黙ってしまったり、意味が分からぬまま終えてしまったりする学生が多い。

Canal (1983) によると、コミュニケーション能力は文法能力、社会言語能力、談話能力とストラテジー能力にわかれる。このストラテジー能力は「コミュニケーションがうまくいかなくなったときに、自分や相手の発話をコントロールして修復する能力」（国際交流基金 2007）である。また、会話におけるストラテジー能力は「学習者が（生得的に、あるいは習得によって）身についた、さまざまな能力を使って課題を成功させるのに重要」（吉島・大橋 2014）であることから、コミュニケーション能力の基幹と位置づけられる。

本研究では、このストラテジー能力を孤立環境の日本語教育の場面でどのようにして修得させれるかを問題とする。

2. 目的

学生のストラテジー能力のレベルは多様であり、各人が到達したい目標は更に多様である。その様な多様な目標に対応するためには、それらの必要性に応じたストラテジー能力を個別学習をする必要があり、その個別学習をするにはICT 活用が必須である。そこで、鈴木・平岡（2021）の ICT 活用授業を設計するデザイン原則案の「3）「教員から学ぶ」から、「情報・教材で学ぶ」にシフトすること」を取り掛かりとし、ICT を活用した独学教材（以下、ユニットと呼ぶ）で学習するストラテジー能力のユニット作成案を作ることを目的とした。

3. 方法

言語学習に関しては、CEFR という欧州評議会によって公開された「外国语の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」というスタンダードがある。そのレベルは、A1, A2, B1, B2, C1, C2 の 6 段階あり、A は基礎段階、B は自立した言語使用者、C は熟達した言語使用者である。そして、日本語には、JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）という CEFR に準じた国際交流基金が作成したものがある。両者において、言語を使用して何ができるかを記述した文を Can-do と言い、言語能力の総合的評価を段階的に示している。

そこで、まずその評価を参考にするべく、こ

の JF スタンダードからストラテジー能力に当たる記述を探したが、方略はあるものの、本稿で述べているストラテジー能力である CEFR の方略とは違う「テクスト」に該当するものであった。

よって、本稿で扱うストラテジー能力である CEFR の方略（ストラテジー）から受容、産出とやりとりの方略で、学習対象者のレベルである A1 から B1 の Can-do をリストアップした。この受容とは「読む・聞く」、産出は「まとまった内容を話す・書く」というコミュニケーション言語活動である。

しかし、これらの Can-do は一般的な記述であることから、明確に何ができるかその Can-do ができたのかが分からず、よって、それらを参考に教室でのストラテジー能力に関わる具体的な現状課題を明らかにし、その課題を解決するための達成すべき学習目標として設定することで、ICT 活用授業のユニット作成案を開発した。

4. 結果

CEFR の方略の Can-do を参考にすることで、表 1 の通り、ICT 活用授業でストラテジー能力を個別学習する独学教材の学習目標を明確にしたユニット作成案が設計できた。

本ユニットは、学習者の多様なニーズに応えるため、ストラテジー能力全ての言語活動毎に A2 と B1 の両レベルを扱っていることが特徴である。最も低いレベルである A1 の方略は、その言語レベルでは利用できる Can-do はないとされていた為、本稿では設計対象としなかった。

5. 考察と展望

本稿では、A2 と B1 レベルの受容、産出とやりとりの対象となる言語活動を網羅したストラテジー能力を ICT で学習するユニットの学習目標を設定した（表 1）ことにより、学生のストラテジー能力のレベル及び各人の目標の多様性は対応できた。

しかし、これらを個別学習するためには、ICT を活用する具体的なユニットの作成が必要である。今後は、ストラテジー能力のユニット作成案（抜粋）（表 1）の学習目標を達成するための教授方法及び評価の設計及び教材開発を行う。

また、鈴木・平岡（2021）の ICT 活用授業を設計するデザイン原則案を基に課題を洗い出し、改善し、妥当性のあるストラテジー能力育成のための授業設計及び開発を進めていく予定である。

表 1 ストラテジー能力のユニット作成案（抜粋）

受容：意図を推測する
ユニット 1 【現状課題】日常の具体的な内容や話題の短いテキストや、発話の中で知らない単語が出たら、そこでかたまつてしまう。又は、分からないと終わらせてしまう。 【学習目標】日常の具体的な内容や話題の短いテキストで知らない単語のおおよその意味を述べることができる。
ユニット 2 【現状課題】話題が身近なものであっても、知らない単語の意味を文脈から推定しないため、文の意味を推論することができない。 【学習目標】身近な話題を聞いて、知らない単語の意味を文脈から推定し、文の意味を述べることができる。
産出：自分の発話をモニターする
ユニット 8 【現状課題】コミュニケーションが失敗してもそのままにし、会話が終わってしまう。 【学習目標】会話が失敗していると感じたら、そのままにせず、違う言い方や違う方法で伝えることができる。
ユニット 9 【現状課題】自分が使った言語形式について意識しない。 【学習目標】自分が使った言語形式が正しいかどうかを確認することができる。
やりとり：議論の展開に協力する
ユニット 14 【現状課題】相手に自分が理解していることや身振りで示すことの必要性や、それを示す方法がわからない。 【学習目標】コロンビア人、日本人の理解している際の身振りの違いを学び、相手に応じてどのようにすれば会話が心地よく弾むのか、相手によって妥当な身振りを説明できる。
ユニット 15 【現状課題】相手が話しているが、聞いているだけで、会話の内容を互いに理解しているかは確認をしないまま、言いたいことを交代に伝えて会話を終わらせていく。相手が何を言いたかったのかの予測もつかず、話し合いに発展しない。 【学習目標】日本語とスペイン語における互いの理解を確認するための繰り返しの方法の違いを説明し、それぞれの話し相手にあった会話がどのような計画で話しているのか予測し、どんな繰り返しが発展により効果的かを述べることができる。

参考文献

- 国際交流基金（2007）日本語教授法シリーズ6『話すことを教える』 株式会社ひつじ書房
 国際交流基金日本語国際センター
<https://jfstandard.jp/publicdata/ja/render.do#sec01> (参照日 2022.5.15)
 鈴木克明、平岡斉士（2021）ICT を活用した授業デザイン原則の提案—交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて—、名古屋高等教育研究、第 21 号、143-165
 福島青史、イヴァノヴィア マリーナ(2006) 孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み—ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として—、日本語教育 165, 89-104
 吉島茂、大橋理枝他訳・編（2014）『外国語教育 II 追補版 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
 Canale, M. (1983). From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy. In J. C. Richards, & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and Communication* (pp. 2-14). London: Longman.